

大学図書館問題研究会 京都

京都市左京区吉田本町

京都大学教育学部図書室

(竹村心気付)

TEL 075-751-2111 (内3013)

同志社大学図書館オープン十年の歩み

閲覧部門を中心に

竹本文夫

(同志社大学)

新館オープンで急増した利用者と我々の対応 一開館時間の縮小一

1973年12月に冷暖房完備の新館が大学キャンパスの中心にオープン。まず予想をはるかに上廻る学生の殺倒におどろきうれしい悲鳴をあげた。返却本の納本ひとつとつてもしばしば昼までかかるありさまで、開架図書の配列もおどろくほど乱れたがほとんどなおすひまはなかった。試験期には、午後何人かが納本し更に夕方にはほとんど全員が残業で納本しないと返却本の置き場もなくなるほどであった。

建築準備に忙殺され、図書の移転でヘトヘトになったあと今度はこの忙しさ。過労で2~3人病人もでるありさま。ついに朝9時から開館していたのを納本のため1時間おくらせカウンター部分は10時からに、更に土曜も午後は閉鎖、二部学生のため夜6時から再開という提起がなされた。反対もかなりあったが、新館建築にあたって定員増はしないという前提もあり健康を守るためにはやむをえないという主張があってこの提案は通ってしまった。更にその上、春休みと夏休みは午前

中だけ、しかも書庫の本の出納は一日おきということになってしまった。

移転のための休館は1ヶ月のみ。新館の新しいシステムでの業務遂行は試行錯誤と会議の連続であり、当初はしばしば日曜出勤もしながらの意志統一という強行軍であった。とても年休などとれずせめて春休みや夏休みにはゆっくり休みたいというのがみな願ひでもあった。

わきあがる図書館批判

立派な新館がせつかくできたのに利用時間の短縮で旧館時代より不便になったことから図書館批判がではじめた。図書館の内部でも特に春休みや夏休みの一日おきの出納はいくらなんでもゆきすぎだという声ではじめ、少しづつ業務も整理されてくるにつれ、休み中も毎日やろうということになり翌年からは毎日午前中、翌々年からは春休みだけ終日オープンになった。

しかし、いったんではじめた図書館批判は静まるどころかますます強くなり、教授会が労働組合の大会にいたるまで発言されるようになった。丁度その頃大学予算の中の図書

費が年々急増していた時期でもあり、各学部の本も図書館で集中整理しており、この整理のおくれが大きくなっていくこととあわせて教員の図書館に対する批判・不満が非常に強くなっていた。

館内でも土曜午後に開館しようという声はかなり早くから出はじめ、その方向で論議は始まっていたが、利用者はその後もへどころかますますふえており、全体が一致するにはいたらなかった。

労働組合内に図書館問題委員会設置

新館がオープンして2年目の75年くれの組合大会ですでに図書館批判がでていたが、その翌年の76年末の大会ではかなり大きな論議となつてついに77年1月には執行部内に図書館問題委員会が特別に設置された。そこには図書館選出の執行委員も1名加わったが批判の矢面に立たされ大変だったという。そこでの論議のポイントは、開館時間の延長、開架室への持ち物の持ち込み制度緩和、整理のスピード・アップ、そして図書館と学部図書室との有機的関係の確立の4点であった。しかしそこでは問題点の整理にとどまり次期執行部に改善策の具体化が持ちこされた。

組合より当局へ要求の提出

新館オープン5年目の78春闘では諸要求の一環として図書館関係の要求がだされ、当局との間で交渉もたれた。しかし当局は現場で検討させるというのみで大学としての責任ある態度を示さず、図書館と組合との対立にすりかえられる危険があった。交渉の席上ではあいまいにしていた当局であったがその後整理のためのアルバイトの大巾な増員が認められ事実上一步前進した。だが問題の閲覧部門についてはなにも進展がなかった。

組合大会で図書館問題に論議が集中。 再び図書館問題委員会設置

78年末の組合大会では図書館の代議員より「この問題は労働条件と密接な関係があり慎重な対応が望まれる。なにが原因でどこに問題があるのか十分な実態把握が必要でありそのためにも関係職場の意見が充分くみあげられる必要がある。」との発言がきっかけとなり論議の大部分がこの問題に集中した。そして大会で次年度には執行部外の人も含めた特別委員会を設置することが決定された。

この特別委員会には図書館からも3名参加し精力的な活動が展開された。内外の資料を広く集め、他大学の図書館の実態調査も行ない、この問題が単に同志社だけの問題ではないことを明らかにした。整理冊数も高水準にあり、貸出冊数も全国のトップであることがはっきりした。この調査活動の中で教員委員の図書館への理解が深まり、今まで問題にしていなかった質の問題にも眼が向き、レファレンス・サービスの向上を求める意見がでてきた。調査活動の成果は「図書館問題を考える」というパンフにまとめられ、80年7月に全組合員に配布された。

組合内に三たび特別委員会設置。学生へのアンケートを行なう

「図書館問題を考える」というパンフは、全学的な視野に立ち、全国的な比較をしながら同志社の図書館の実態を明らかにし問題点を指摘したが、改善策（要求）の具体化までにはいたらなかった。そのため81年度に三たび特別委員会が設置された。この3度目の委員会は図書館支部との懇談を重ねながら討議を深め、学生へのアンケートを行い、それをふまえて答申の作成を行った。

このアンケートの是非をめぐって何度か職場討議が行なわれた。このなかで現場職員からの調査項目の修正案がだされそれも一定と

りいれられた。アンケートの是非というのは、図書館業務に直接責任をもたない組合が行なうことの是非であり、又調査項目も図書館外の教員主導で作られることの不安であり、いずれにしても調査結果について責任ある対応ができるかどうかという不安であった。更に又、調査結果にもとづいて労働強化を事実上組合から押しつけられるのではないかという不安もあった。しかし、図書館自体今まで一度も行なっていないなかで正面きって反対ともいえず結局多少の不安をもちながらも調査は実施された。

この調査は81年10月27日(火)に学生の入館時に調査用紙を渡し、退館時に箱にいらしてもらおうというやりかたで行なわれた。調査用紙の配布に教員が先頭にたったこともあってか、3千枚の配布に対し2,353枚の回収(78%)でその回収率の高さに我々はおどろいた。その他に何人かの教員の協力で幾つかのゼミや小クラスでも配布され369通の回答をえた。

アンケート結果

ごく一部を紹介する。

平均利用時間 多くの学生は図書館を週1～3回利用し、1回あたり1～2時間図書館ですぐす。それは週平均授業時間数の8分の1になる。

主に利用する時期 「常時利用」が約50%、「ときどき利用」が40%、「試験期など特別なときだけ」が8%。

夏休み中の利用 「ある」が43%、「ない」が50%であるが、1年は20%、順次あがって4年は68%が「利用あり」と答えている。

閉架図書の利用 「よく利用する」が5%強、「ときどき利用」が27%、「利用したことがない」が46%、そして「あることを知らなかった」が実に20%もあった。

必要な文献がないとき 「自分で買う」が

60%以上、「他の図書館へ行く」が15%。

本がどこにあるかわからないとき 「目録や索引で調べる」が40%、「係員に聞く」が15%、「先生に聞く」は10%。

その他では、貸出期間の1週間を2週間へ延長、9時からの開館、開架図書の増加も多かった。図書館員の対応態度の不満もかなりあった。

利用度はかなり高いが、職員は貸出、返却、出納、納本に忙殺され、我々としては精一ぱいがんばっているつもりであるが、利用者にとってはサービス内容も開館時間も我々の態度にもいろいろな不満があることがわかった。

こうした組合活動が展開されるなかで職場討議、又、課や係としての会議も行なわれ、土曜の午後開館が82年から実現した。勤務は残業ではなく時差出勤となった。

検討委員会の答申と要求の具体化。9時開館の実現

検討委員会は、アンケート結果にもとづき要求を具体化して答申パンフ「図書館問題の改善に向けて」を作成し、82年4月に全組合員に配布した。答申は大学の図書行政全般にかかわることから具体的な、例えば「開館は9時からにすること」とか「貸出期間は2週間にすること」等まで、又、「図書館支部への要望」「教員支部への要望」「執行部への要望」等34項目にわたって指摘し、アンケート調査の資料も公開した。

この答申にもとづき82年度執行部は要求原案を作成し職場討議を要請した。一番問題になったのは「9時開館」であった。利用の急増におどろいた新館オープン時にくらべて更に4割以上も貸出がふえており、業務の整理と慣れでこなしている現状では9時開館は相当な労働強化にならざるをえない、当局は現場の負担でのりきるだろうという強い不安が表明された。しかし一方では以前から社会通念に従って9時には開館すべきだという

意見がでており、これを機会に当局に条件整備をさせて実現すべきだという意見も多数だされた。職員のあり方、特に大学図書館でのあり方も含め何度も職場討議が行なわれた。昼休みにやり又その日の業務のあとつづきが行なわれたこともあった。ほとんどの人が出席した。結局条件整備を含めて要求することに一致した。

その後今度は課や係での会議が何度ももたれ、夜間7時～9時の2時間3名の学生アルバイトを導入、或る程度の納本を行う、それによって朝の納本量をへらしカウンター要員を生みだす、そして9時から貸出・返却は行なうが10時までは出納はしないということとで一致。当局もその条件を受け入れ、やっと問題になって8年目の8³年4月に、不完全な形ではあるが世間並の9時開館が実現した。

レファレンスの取り組みへ向けて

82年度は入館者数95万人、貸出冊数16万6千冊、内閉架図書6千6百冊、4%。アンケートの結果でも係員に聞くというのが低く、なければ自分で買うとかあきらめるといのが高率であり、利用指導、宣伝、レファレンスの貧困は明白である。

レファレンスの専任は1名、カウンターにつめるのは隔日の午後のみという体制。それでも1名ではツールの作成等大変であった。サービス強化、カウンター要員の水準アップは長年の懸案であったがやっとその第1歩が昨年秋より始まった。5名よりなるレファレンス委員会を作り、専任担当者が事務局とな

って全体の調整をしつつ月曜～金曜の午後、学生のもっともよく通る動線の近くに小カウンターを設置して質問に対応するというのである。この問題をめぐってもいろいろ論議があった。特にレファレンス・グループに入る人と入らない人との関係と団結、仕事の配分等大きく問題になったが、とにかく第1歩をふみだそうということで発足した。

おわりに 「貸出だけが仕事ではない」という議論が何度かだが、やはり利用者にとって開館時間の拡大、貸出期間の延長がまず第一だということ、又利用が大衆化し貸出がのびるほど図書館の問題が一般的な関心事となり、我々の弱点がクローズ・アップされるということがよくわかった十年であった。しかし又、図書館問題が全学的な関心事となり労働組合の問題となることによって改善の条件も作り出され、我々なりに一歩ずつ前進してきた十年でもあった。今までふれなかったが8³年度からの整理の電算化とブック・ディテクションの導入も、このような背景があったからこそ、それが全国的な趨勢とはいえ、実現したと思う。旧館時代にはこんなぼう大な予算をとまなうことは考えられなかった。ブック・ディテクションのおかげで開架室への持ち込み制限もなくなった。貸出期間もいよいよこの4月から2週間に延長されることになった。今後は更に貸出をのばしつつサービスを強化することとあわせ教員にとっても役に立つ利用しやすい図書館をめざして一歩ずつ歩んでいきたいと思う。

— 研究集会・例会案内 —

| | | |
|------------|------------------------|---------|
| 第10回全国研究集会 | 4月28～29日 | 新潟市 |
| 4月例会 | 京都大学附属図書館見学会(予定) | |
| 5月例会 | 「学術情報とコンピューター」 辻井潤一氏 | |
| | 5月12日(土) 14:00 - 16:00 | 京大附属図書館 |